

生活どのように変化

関西学院大 大秋地区で調査



西目屋村大秋地区で50年前と同様に行われた都市社会学の調査(右から大谷教授と笹森氏、学生ら)

50年前の結果と比較

西目屋

西目屋村の奥部の大秋地区で、関西学院大学社会学部(兵庫県)の教授や学生が二十四日、農村と都市のかかり方などを研究する都市社会学の一環で、全五十三世帯を対象に聞き取り調査した。大秋地区では五十年前にも北海道大が調査しており、その調査結果は、都市社会学の権威と評価される文献「都市社会学原理」(鈴木榮太郎著)に登場する。今回は、当時と同じ調査項目を盛り込んでおり、現在と半世紀前を比較検討するのが狙い。

(鎌田秀人)

調査では大谷信介教授と研究室の三年生十三人が三班に分かれ、同地区の各世帯から「弘前まで

の交通手段」どこから嫁いだか」などを聞き取った。五十年前に鈴木榮太郎氏(当時北大教授)の下で、助手として調査に携わった旭川医大名誉教授の笹森秀雄氏(○)も今回の調査に同行。前日には弘前大で講演し、当時の調査状況を紹介した。大谷教授らとともに、元役場職員の三上紘一さん(○)方を訪れた笹森氏は「ここまで来るのに当時は砂利道だったが、立派な道路になった。役場も見てびっくりした」と懐かしんだ。三上さんは「すごい研究ですね。この地区もだいぶ変わりました」などと感心した。今回の調査によって、交通機関の発達や、時代の変化がもたらす事柄が把握できるという。大谷教授は「五十年前と突き合わせて、来年中には調査結果をまとめたい」と話している。